



「脳卒中ホームエクササイズ」

荻島秀男監修・井口恭一著

脳卒中患者の家庭での訓練についての専門書は我国においても近年多く見受けられる。しかし、他に比べ本書の特徴は、回復段階に応じた訓練の章に代表される如く、著者の経験から分析したキメ細かな説明と、各動作を介助のある場合と介助のない場合に分けて述べてある点である。このため、患者の能力によって適切な訓練を施行しやすくなっている。全体に13章から構成され、リハビリテーション、ホームエクササイズについて、脳卒中と機能障害、随伴症状とその対処、合併症とその対処、回復段階に応じた訓練、関節可動域訓練、運動機能維持訓練、基本的な動作の訓練、歩行に関する訓練、日常生活動作の訓練、異常歩行とその改善、下肢装具とその使用等について述べてある。リハビリテーションチームメンバーの説明、社会資源の活用にも触れてあり、病

態、随伴症状、合併症等も説明が加えられているので、病氣そのものを理解することにも気がくばられている。

また900に近いイラストは著者自身が描いたものであり、これを十分に駆使してあるので初心者でも理解しやすい。

理学療法士の立場から見事に本書をまとめられた著者に敬意を表したい。本書を患者およびその家族は勿論、リハビリテーション関係の専門家にも一読をお勧めしたい。理学療法・作業療法の現場に常備しておき、退院時の患者指導の際に、必要な図表を示しながら説明を加えることより効果的で理解を得やすいと思われる。

(A 5 頁 400 ¥2,800 〒240 医歯薬出版 1979)

(兵庫リハビリテーションセンター 理学療法士 山下隆昭)

「家族クライシス療法 (地域精神衛生活動の実例)」

D. G. Langsley・D. M. Kaplan 著, 桑原正明・打田茉莉・融道男訳

治療実践の場が精神病院から地域医療へと移行しつつある今日、より効果的な治療論として、家族クライシス療法が研究された。

この研究は、不必要な精神病院入院をさけ患者を毎日の生活から切り離さないことを目標とし、家族を問題の生ずる舞台であると同時に、患者を支える強さの源泉として焦点を合わせていこうとする、地域精神衛生活動の原則にかなうひとつの典型例として述べられている。

この技法は、一般開業医や家庭医の姿勢、立場に極めて似ている。過去の内面葛藤を探ることより、クライシス療法の仮説に基づき現実の破壊的状况を改善し克服することに重点がおかれる。仮説とは、“急を要する時に適切な援助があれば慢性化は予防される”ということである。

家庭内の一員の疾病や症状は、部分的には家族内葛藤の現われであり、クライシス(精神科医救急事態)にあ

る人は、社会的単位である家族内部の破綻や不均衡を表現しているのかもしれない。精神病が家族内人間関係の産物とすれば、治療対象は家族全体となる。家族はストレスの源となるだけでなく、ストレス解決の主要な手段ともなっていることに視点を置いている。その成果は、(1)個人のクライシスの解釈、(2)緊張の緩和、(3)症状の軽減、(4)防衛機制の回復、(5)入院が避けられる、(6)家族そのもののうちにある急性の興奮症状を緩和し家族の問題解決能力を発揮させる、(7)治療費の節約などである。

社会環境の中で積極的に治療をしていく姿勢には、改めて学ぶものが大きかった。医療チームにOTは参加していなかったが、OTを含め精神医療従事者の治療姿勢に対する問題提起であるように思われる。

一読するのに値するであろう。

(A 5 頁240 ¥3800 〒200 医学書院 1978)

(岡山県立内尾センター 作業療法士 佐久間調子)